

新潟県における未発見城柵研究の現状と課題

－第46回古代城柵官衙遺跡検討会の補遺－

田 中 祐 樹

1 はじめに

去る令和2年2月22日、23日に開催された第46回古代城柵官衙遺跡検討会では、『未発見城柵の調査・研究の現状』をテーマに、東北と新潟県の未発見城柵にかんする研究の現状と課題が議論された。筆者は事務局より「越国の未発見城柵」という課題を与えられ、下記の3点に焦点を当てて概要を報告資料としてまとめた[田中2020]。第一に、これまでの城柵探索を含めた調査・研究史。第二に、発掘調査で明らかになった柵造営前後（7世紀中葉～8世紀前半頃）の城柵・官衙関連遺跡の状況。最後に遺構・遺物からみた城柵造営前後の地域動向にかんするこれまでの研究成果の報告である。だが、紙幅の都合で割愛せざるを得ない部分が多かったことから、本稿では補遺という形で、改めて新潟県における未発見城柵研究の現状と課題について私見を述べることにする。

2 未発見城柵の概要

越国の未発見城柵とは、すなわち「淳足柵」「磐舟柵」（場合によっては都岐沙羅柵を含む）を指し示す（第1図・第1表）。だが、いずれの城柵も考古学的な見地からは、その実態は明らかではなく、その構造、推定地さえも確固たる根拠に基づいたものとはいえない。そこでまずは、未発見城柵の概要について把握されている知見について改めて触れておきたい。

（1）淳足柵

『日本書紀』大化3（647）年条「造淳足柵、置柵戸。老人等相謂之曰、數年鼠向東行、此造柵之兆乎。」

越後城司威奈大村墓誌銘（707）「越後城」

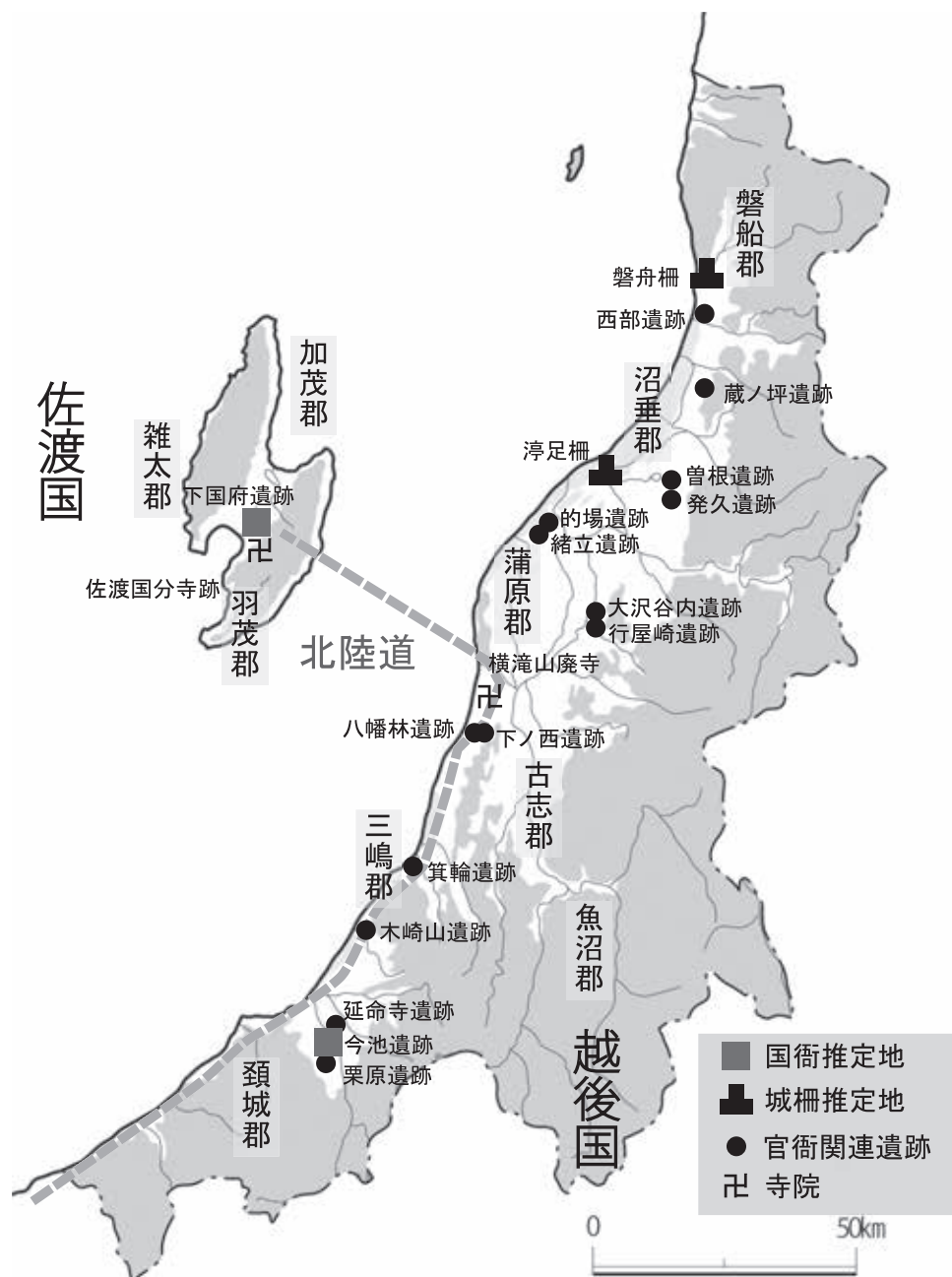
八幡林遺跡第2号木簡 養老（717～724）「沼垂城・養老」

『日本書紀』の記述では647年造営とされる。これまでの研究では阿賀野川右岸の河口付近（新潟市東区）に所在したとする意見が有力であるが、関連する遺構等は確認されていない。

平成2年、八幡林遺跡「沼垂城」木簡（第2号木簡）の発見によってその存在が史実である可能性が高まった。すなわち690年に越国が越前・越中・越後・佐渡の四国に分割され、越後国が成立するが、越後国衙は淳足柵に置かれたために「越後城」と呼ばれた可能性が高い。その後、和銅7（712）年に出羽郡が出羽国として分立し、越後国衙が頸城郡に移動した後には、郡名である「沼垂」を冠して「沼垂城」と呼ばれるようになったと考えられる。

淳足柵が果たした役割として、設置当初には日本海側の蝦夷政策の拠点として、最前線の磐舟柵への支援、阿倍比羅夫に代表される北方遠征の拠点・支援、地域再編の拠点、柵養蝦夷への対応などが挙げられる。その後、出羽国が分立し、対蝦夷の最前線から退いたのちには、最前線である出羽柵（秋田城）への後方支援的な役割を果たしたものと推察される。

また、近年では小林昌二によって、1年違いで造営された淳足柵と磐舟柵が、内水面で繋がった自然環境をもとに同時計画された城柵（兄弟の柵）であるという見解が提出されている[小林ほか2004]。



第1図 新潟県の城柵・官衙関連遺跡

第1表 新潟県の城柵・官衙関連遺跡一覧

遺跡名	所在地	7C2	7C3	7C4	8C1	8C2	8C3	8C4	9C1	9C2	9C3	9C4	10C	遺跡の性格	文献
下国府遺跡	佐渡市													佐渡国衙か	堅木ほか2011他
佐渡国分寺跡	佐渡市													佐渡国分寺	川村2008他
西部遺跡	村上市													国関与の鍛冶工房	小林2010
蔵ノ坪遺跡	胎内市													川津	平川ほか2002
曾根遺跡	新発田市													手工業生産拠点	川上1997他
発久遺跡	阿賀野市													「健児」木簡、兵庫か	川上ほか1991
大沢谷内遺跡	新潟市													城柵支援	新潟市教委2012
緒立遺跡	新潟市													的場遺跡と関連。律令祭祀	渡辺ほか1994
的場遺跡	新潟市													水産物の捕獲・加工、律令祭祀	小池ほか1993
行屋崎遺跡	田上町													律令的祭祀。城柵支援	田畑ほか2015
横滝山廃寺	長岡市													越後最古の寺院	寺村ほか1985他
八幡林遺跡	長岡市													創建期には城柵の可能性	田中靖ほか1992他
下ノ西遺跡	長岡市													古志郡衙関連	田中靖ほか1994他
箕輪遺跡	柏崎市													古志郡衙の別院か	高橋保ほか2002他
木崎山遺跡	上越市													頸城郡衙別院	戸根ほか1992
延命寺遺跡	上越市													頸城郡衙の出先機関	山崎ほか2008
今池遺跡	上越市													越後国衙か	坂井ほか1984
栗原遺跡	妙高市													頸城郡衙か	高橋勉1984他

（２）磐舟柵

『日本書紀』大化 4（648）年条「治磐舟柵、以備蝦夷。遂選越與信濃之民、始置柵戸」

『続日本紀』文武 2（698）年条「丁未、令越後国修理石船柵」

『続日本紀』文武 4（700）年条「己亥、令越後佐渡二国修營石船柵」

1986 年刊行の『新潟県史』通史編一原始古代での記述に従えば、『日本書紀』では 648 年造営とされ、文武年間に二回の脩造記事があることから、この段階までは存続したことがわかる。古くから旧岩船潟周辺（村上市）に設置されたと考えられており、石船神社や諸上寺付近など推定地には諸説あるが、これまで明確な遺構は確認されていない。磐舟柵は、日本海側の対蝦夷対策の最前線として淳足柵とともに造営され、その役割は、出羽国が分立し、対蝦夷政策の最前線から退くまで続いたと考えられる。

（３）都岐沙羅柵

『日本書紀』斉明 4（658）年 7 月 4 日条。「甲申、蝦夷二百餘詣闕朝獻、饗賜贍給有加於常。仍授柵養蝦夷二人位一階、淳代郡大領沙尼具那小乙下或所云授位二階使檢戸口、少領宇婆左建武、勇健者二人位一階、別賜沙尼具那等鮪旗廿頭・鼓二面・弓矢二具・鎧二領。授津輕郡大領馬武大乙上、少領青蒜小乙下、勇健者二人位一階、別賜馬武等鮪旗廿頭・鼓二面・弓矢二具・鎧二領。授都岐沙羅柵造闕名位二階、判官位一階。授淳足柵造大伴君稻積小乙下。又詔淳代郡大領沙尼具那、檢覈蝦夷戸口與虜戸口。」

斉明 4（658）の「都岐沙羅柵造に位二階を、判官には位一階を授ける」という内容の位階記事として日本書紀に登場する。この段階には都岐沙羅柵が設置されていたことは間違いないが、柵の位置、存続年代については不詳である。都岐沙羅柵比定地にかんする研究史をまとめた植松暁彦によれば、下記のとおり諸説が提示されている〔植松ほか 2020〕。

佐藤禎宏：最上川河口の潟湖付近または旧山北町（現村上市山北）〔佐藤 1978〕。

新野直吉：現在の新潟県と山形県の県境付近〔新野 1986〕。

小野 忍：温海町（現鶴岡市）の木俣付近または、温海町の鼠ヶ関〔小野 1994〕

加藤 稔：最上川河口の潟湖の近縁の地〔加藤 1996〕

阿部義平：内陸部の米沢盆地の南陽・高畠付近〔阿部 2006〕。

川崎利夫：鼠ヶ関、越後と出羽の境界かつ日本海に臨んだ場所〔川崎 2009〕。

候補地説は、新潟県と山形県の県境地域に設置されたと考える見解（佐藤・新野・小野・川崎）と山形県北部の最上川河口付近を想定する見解（加藤）、内陸部の米沢盆地を想定する見解（阿部）に大別される。いずれの見解も論拠に乏しく、考古学的見地からのアプローチは皆無と言ってよい。

また、工藤雅樹は、都岐沙羅柵が第一次出羽柵であるとする見解を表明している〔工藤 1998〕。阿倍比羅夫の遠征記事を参照し、朝廷側についた庄内地域の蝦夷を飽田蝦夷から保護するために設置したと考えられている。

3 未発見城柵の調査・研究小史

主に考古学的見地からの調査・研究に主眼を置くが、前述のとおり城柵遺跡そのものの発見には至っていない。ここでは、未発見城柵をめぐる調査研究の経過について、画期となるトピック毎に詳述する¹⁾。

（１）石櫛堡と浦田山古墳群の調査（第 3 図）

昭和 31 年、村上市瀬波海岸の浦田山で失業対策の工事中に石組遺構（第 1 石櫛堡）が発見された。この発見以前に、磐舟柵が浦田山周辺ではないかと考える意見があり、石組遺構が磐舟柵に関連する施設の

一部ではないかとされた。この発見を受け、村上市と新潟市は文化財保護委員会（現文化庁）に専門家の派遣を要請、国は文部技官であった斎藤忠を現地へ派遣し、現地調査をおこなった。斎藤は、石組遺構を自ら測量した上で、柵との関係を見極めるために慎重な調査が必要と指摘している。これを受け、翌年国庫補助事業として「磐舟柵跡」の調査がおこなわれることになった。調査は、文献班、測量写真班、地質調査班、遺物調査班、遺跡調査班の5班体制で進められ、新たな石組遺構（第2石櫛堡）を発見、これらの遺構が磐舟柵に関連する防御施設として「石櫛堡」と名付けられた〔新潟県教育委員会 1962〕。この調査は、現在まで城柵関連の遺構として調査された唯一の事例である。

「石櫛堡」の発見から約30年後の平成元年より、甘粕健を代表とする新潟大学による再測量調査・発掘調査が実施された〔甘粕ほか 1996〕。調査の結果、「石櫛堡」とされた石組遺構が、古墳時代後期の横穴式石室であることが判明、「浦田山古墳群」と改称されるに至った。特に第2石櫛堡とされた第2号墳は、北部九州系の竪穴系横口式石室に類似した特徴を有しており、若狭湾沿岸や能登半島からの強い影響のもと造営された可能性が指摘された。その伝播には日本海を経由するルートが想定されるが、このルートは図らずも阿倍比羅夫の遠征ルートをトレースするかのようであり、興味深い。結果として、石組遺構が古墳石室であることが判明したことで、城柵関連施設という見解は否定されることとなった。だが、文献、考古、地質といった異なる分野による調査は、その後の城柵探索に対する学際的研究の先駆けとなった点においてその意義は決して小さくない。なお、「石櫛堡」の発見と浦田山古墳群の調査については、関雅之によってその学史的意義がまとめられている〔関 2011〕。

（2）八幡林遺跡の調査と沼垂城木簡の発見

平成2年に和島村（現長岡市）教育委員会が、国道116号バイパス建設に伴い八幡林遺跡の発掘調査を実施した。調査の結果、A地区から「沼垂城・養老」「郡司符」と記された木簡（第一・二号木簡）が出土した。前述したように、木簡発見によって淳足柵（のちに沼垂城）が史実であることが確認されたことで、淳足柵・磐舟柵探索が新潟県の古代を考える上で、重要な研究課題となった。本遺跡からは、木簡だけでなく、「石屋木」「大領」などを記した多量の墨書土器、奈良三彩、風字硯などの希少な遺物、四面庇付建物や木道といった遺構が検出されたことで、注目を集めた。

これらの成果を受け、全県規模での国史跡への指定に向けた保存運動が進められ、平成6年4月15日に貴重な古代官衙遺跡であることから国史跡へ指定された。また、発掘調査で得られた成果によって、その後の保存運動が市民レベルでの展開に繋がった。古代城柵探索という新潟県の古代史上の重要課題に対して、いかに県民が高い関心を寄せているかが窺える。さらには、この発見をきっかけに県内各地で城柵関連の講演会やシンポジウム、博物館での企画展、各研究会の活動が活発となり、城柵探索への機運が高まり後述する小林昌二らの研究グループによる学際的調査・研究の足掛かりとなった。

（3）小林昌二らによる淳足柵探索に向けた学際的調査と研究

新潟大学的小林昌二を代表とする科学研究費補助金基盤研究「前近代の潟湖河川交通と遺跡立地の地域史的研究」は、城柵探索を目的とした初めての組織的な試みであり、考古学、文献史学、地理学、地質学、民俗学といった歴史学とその周辺分野による学際的な取り組みであった〔小林ほか 2004〕。

現段階で淳足柵発見には至っていないものの、研究を通じて城柵探索への有効な方法が確立されるなどその成果は多岐に及ぶ。なかでも今後の城柵探索に向けた有力な手掛かりとなり得る成果として、下記の2点は特に重要なものである。

①有力な推定地である沼垂地区のボーリング調査

淳足柵の有力な候補地である沼垂地域のボーリング調査を実施した。この調査の目的は、(1) 越後平野の古地理復元。(2) 沼垂地域の浅層地質の解明、遺跡立地基盤層の把握にあった。

(1) に関する成果では、新砂丘1 (縄文時代中期) が約 20 m 埋没している状況が把握され、砂丘と砂丘間低地、汽水の潟、湿地帯から構成される 5,000 年前の景観が復元された。越後平野における遺跡動態や古地理復元にあって、「沈降」という要素を見積もる重要性が明確に提示された点で大いに評価される。

(2) に関する成果では、沼垂地域に所在する新潟市大山町、松島町において、地表下約 5 m で旧地表面と考えられる層を検出した。C14 年代測定では、 $770 \pm 30\text{yrBP}$ ($910 \pm 30\text{yrBP}$) (測定基準 1950 年) という平安時代頃という結果が出ている [ト部・高濱 2004]。また、これらの結果を受けて考古学的な調査が検討されたものの、実現には至っていない。だが、採取された土壌サンプルからはイネ科、ソバ科のプラントオパールが検出されたことから、沼垂地域において平安時代にイネ・ソバ類を栽培していた可能性が浮上した。この事実は、直接的に淳足柵の存在を示すものではないものの、今後、城柵をはじめとする埋没遺跡の存在を把握する手法として、ボーリング調査の有効性が示された点において評価されるべき成果である²⁾。

②『新潟県内出土古代文字資料集成』の刊行

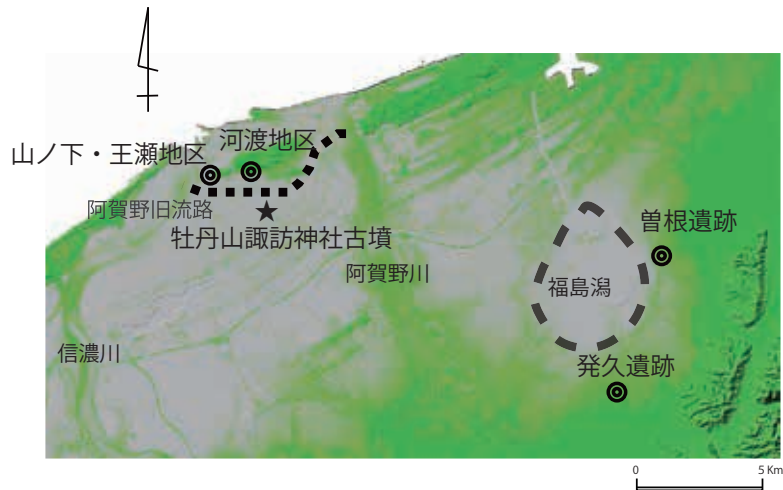
平成に入り、長岡市八幡林遺跡の「沼垂城・養老」、「郡司符」木簡、「大領」墨書土器や、新潟市市場遺跡の「杉人鮭」、「秋食」木簡をはじめ、遺跡から文字資料が確認される事例が急増した。それと前後して、石川県、山形県、神奈川県などでは県単位の集成・公開が進められ、さらには吉村武彦による全国的集成データベースの構築がなされた。こうした全国的な動向の中、県内研究者や新潟墨書土器研究会が中心となり、集成作業を経て刊行された。

(4) 新潟県教育委員会による取り組み

新潟県教育委員会では、平成 24 年 (2012) に越後国域確定 1300 年記念事業として、新潟県の古代史を多角的な視点から捉え直すさまざまな取り組みをおこなった [新潟県教育委員会 2013 ほか]。とりわけ、城柵設置から越後国成立までの新潟県の歴史を、考古学、文献史学、地理学、服飾学といった多彩な分野の専門家による講演会・シンポジウムとして取り上げたことによって、新たな研究視点が提供された点を強調したい。前述の小林昌二らに代表される学際的な取り組みが、今後一層求められてくることは間違いないであろう。未だ、城柵発見には至っていないものの、依然として新潟県の古代史上の重要なテーマであることに変わりはなく、これからも城柵探索へのアプローチは続けられることが期待される。

4 未発見 (未確定) 城柵の推定地と調査について

淳足柵、磐舟柵の推定地を巡っては古くから歴史研究者の関心が高く、淳足柵、磐舟柵の読みが、『延喜式』中「沼垂郡」、「磐船郡」の「ぬったり」「いわふね」に通じること。さらに『倭名類聚抄』の「沼垂郡」、「沼垂郷」、「磐船郡」との対応からおおよその範囲を推定してきた経緯がある。ただし推定地の中には、根拠が考古学的知見以外のものが含まれ、裏付けとなる資料が明確でないものも多い。ここで取り上げたのは、周辺遺跡の動向や地理的条件からある程度妥当性が担保されると思われる推定地とその根拠である。



第2図 淳足柵推定地

(1) 淳足柵 (第2図)

雄物川右岸の河口付近の台地上に所在する秋田城の立地などから、旧阿賀野川右岸の河口付近 (①、②) と考える坂井秀弥の見解 [坂井 1994] が有力である。他にも、官衙関連遺跡と砂丘列上の地理的条件から候補地とされている地点がある (③、④)。

①新潟市東区山ノ下・王瀬地区

山ノ下地区は、寛永10年の阿賀野川欠けに伴う移転前の沼垂町が所在した地区。付近に柵を想起させる「木戸」の地名がある。王瀬地区には、天保13(1842)に記された『小泉蒼軒日録』に長者屋敷があったという「王瀬長者伝説」が遺されている [小林 2005]。

②新潟市東区河渡地区

河渡「コウド」は国府「コウ」の渡しに通じる。

③新潟市発久遺跡周辺

広い砂丘上の立地。官衙関連遺跡と考えられる曾根遺跡 [川上 1997 など] が所在する。

④阿賀野市発久遺跡周辺

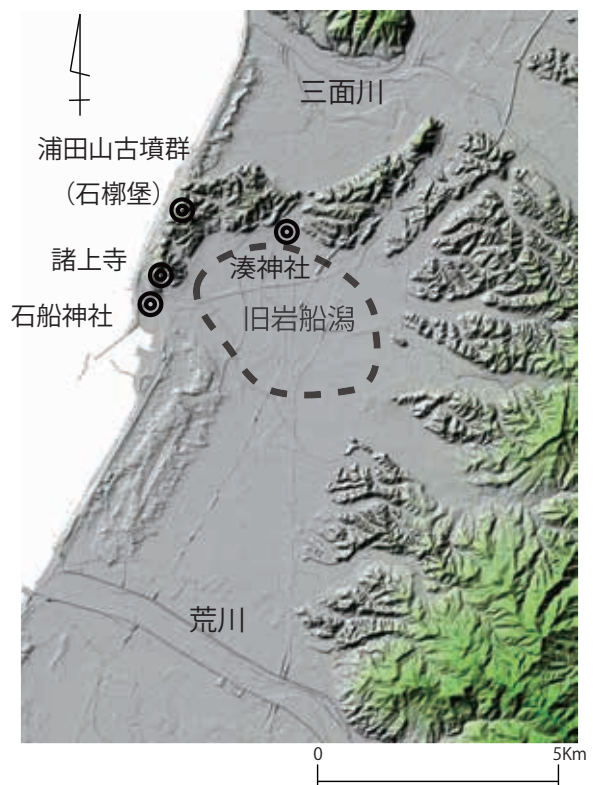
広い砂丘上の立地。官衙遺跡と考えられる発久遺跡 [川上ほか 1991] が所在する。

(2) 磐舟柵 (第3図)

古くから地名が通じることから村上市岩船町周辺に存在するものとされてきた。また、難波宮と難波潟、「草香津」の関係から、村上市日下集落との関係性に注目する意見もある [小林 2004 など]。

①浦田山古墳群・石槨堡 (村上市)

昭和31年、失業対策の土取工事中に発見された石組遺構を城柵の関連施設と推定した [新潟県教育委員会 1962]。その後、甘粕健



第3図 磐舟柵推定地

らによる調査で、古墳石室であることが判明した〔甘粕ほか 1996〕。

②乙宝寺（胎内市）

真言宗智山派の古刹。所在する乙（きのと）がキノト（柵戸・柵端）に通じる。境内には7世紀末頃の塔心礎が存在し、古代の土器が出土した記録がある〔平野 1963〕。

③諸上寺（村上市）

郷土史家の波済健による比定〔波済 1956〕。

④石船神社（村上市）

磐船郡の延喜式内社。大正 15 年に建立された。

「磐舟柵跡」の石碑が境内にある。

⑤湊神社

磐船郡の延喜式内社。七湊の地名。旧岩船潟北岸に位置し、「津」の付近に造営したか〔村上市岩船郡学校教育研究協議会 1955〕。

（3）都岐沙羅柵

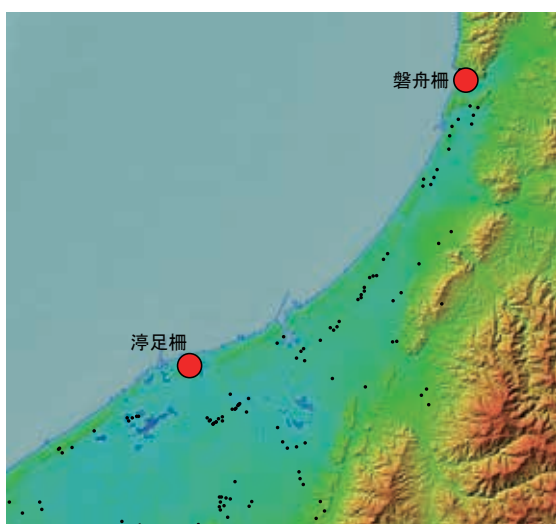
新潟県と山形県の境、「鼠ヶ関」が推定地として挙げられるが、日本海側城柵の多くが、大河川の河口付近に所在することを考えると、新潟県北部から山形庄内地域までを考慮する必要があるとの意見がある〔工藤 2001 など〕。

5 城柵設置地域の動態－弥生・古墳・古代の遺跡分布から－

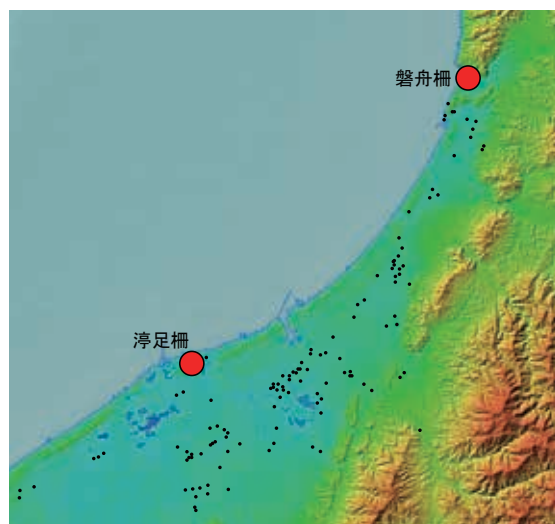
前項までで、新潟県における城柵探索の歩みを通観してきた。多様なアプローチを積み重ねてきた経緯が研究史をたどることで鮮明になったが、それはこの問題が一面的な学術的手法による解決が困難であることの裏返しでもある。

ところで、城柵設置地域³⁾がどのような地域であるのかを今一度見つめ直すことは城柵探索にかんする研究・議論を進めていく前提作業として不可欠なものと考ええる。そこで、本項では「遺跡数の増減」をキーワードに城柵設置地域の遺跡動態について考えてみたい。第4図は、城柵設置地域の弥生時代・古墳時代・古代の遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）をプロットしたものである⁴⁾。また、第2表は、城柵設置地域周辺と国府設置地域（上越市）における弥生時代～古代にかけての遺跡数の推移をまとめたものである。この図表からは総じて弥生時代から古墳時代に比べ、古墳時代から古代にかけての遺跡数増加が飛躍的に増加する傾向を読み取ることができる。遺跡数の増加≒人口増加・生産力向上という安易な図式が成立するかは議論の余地を残すものの、古墳時代から古代への移行期に大きな変革があったことは間違いのないといえるだろう。これは遺跡立地の面からも指摘できることで、弥生時代から古墳時代にかけては、砂丘列上に集落が展開するのに対し、古代には砂丘列上に加えて、自然堤防や微高地上で新たに集落が築かれていくことがわかる⁵⁾。言い換えれば、今まで集落が作られなかった、もしくは作れなかった場所に新たに集落を築くことが、集落数の爆発的増加に繋がったと考えられる。

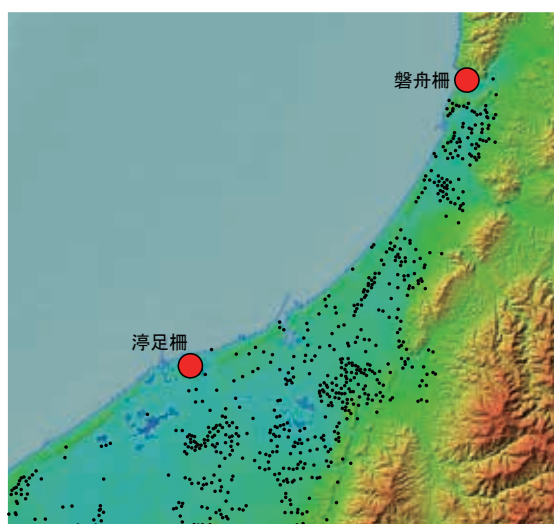
一方、国府が設置された頸城平野がある上越市では、遺跡増加率がそれほど高くはないことがわかる。これは、城柵設置地域に比べて、古墳時代の段階での人口数が多く、開発が進んでいた証左である。これは頸城地域が、宮口古墳群や水科古墳群といった後・終末期群集墳が数多く造営された地域であることから明らかであろう。後期古墳群はおろか集落の存在も希薄である城柵設置地域とは明らかに異なる。



1 弥生時代



2 古墳時代



3 古代

第4図 城柵設置地域周辺の遺跡分布

第2表 弥生・古墳・古代の遺跡数・増加率

	市町村	弥生	古墳	古代	古代／古墳	【参考】古墳／弥生
城柵設置地域	新潟市	49	92	400	4.35	1.88
	新発田市	21	34	218	6.41	1.61
	村上市	26	21	149	7.1	0.81
	阿賀野市	10	4	85	21.25	0.4
	胎内市	6	18	53	2.94	3
	聖籠町	4	42	42	7	1.5
	小計	147	175	956	5.46	1.5
国府設置地域	上越市	31	253	482	1.91	8.16

坂井秀弥は、和名抄、延喜式などにみられる田数に注目し、越後が広大な面積に比して、耕作地が少なく生産性が低い地域であったことを明らかにした⁶⁾ [坂井 2008]。その一方、頸城平野では、面積に比して郷数が多いことから、越後の中では比較的人口が多く、開発が進んでいたと推測するがこれが卓見であることは、遺跡数の増加率からも頷ける。

城柵設置地域は、古代以前の段階において越後の中でも人口密度が希薄で、生産活動が低調な地域であることは間違いない⁷⁾。

そうした地域に城柵が設置されたという事実を改めて認識することが必要である。そして、城柵設置後の地域開発の本格化によって、人口増加、生産力の向上が図られたことで城柵設置以降の古代遺跡数の爆発的增加に結びついた可能性が高いといえる。そして問題は、そのような地域開発、人口増加、生産力の向上といった大きな変革の「きっかけ」となったと考えられる城柵設置、それに伴う柵戸の存在をどのように論証していくのかに繋がることはいうまでもない。

6 柵造営期におけるモノと人の動き－「移民」の存在に迫る試み－

城柵、城柵に関連する考古学的な物証が確認されない現状において、未発見城柵そのものへ迫る試みは今後も継続されるべきである。一方、渟足柵、磐舟柵の設置という事象が、地域社会へ与えた影響、果たした役割を読み解く取り組みがこれから一層求められるといえる。とりわけ問題となるのが、柵戸すなわち「移民」の問題である（第5図）。『日本書紀』大化4（648）年条では、越と信濃からの柵戸の存在が確認できるが、このような「移民」の存在、そして「移民」が果たした役割について、近年、考古学の立場から研究が進められている。ここでは、これまでの研究成果についてケーススタディーとして提示する。

7世紀代の遺跡である新潟市松影A遺跡（第6図）の調査を担当した加藤学は、当遺跡において東北北部～北海道の沈線文土器や擦文土器の影響を受けた土器を見出した [加藤ほか 2001]。さらに加藤は、沈線文土器、擦文土器を構成する諸要素を丹念に検証したうえで、新潟県内における北方系要素を持つ土器の集成にも取り組んだ [加藤 2004]。北陸からの影響を重視してきた従来の研究視点に加えて、「北への視点」という新たな視座を提供した点で評価される。これ以後、新潟県内において東北系土器への関心が高まりをみせていくことになる。

相田泰臣は、古墳時代前期の角田山麓、阿賀北地域の土器様相を明らかにする過程で、新潟市南赤坂遺跡出土土器にみられる北方系要素の検討を進めている [相田 2009]。甕底面にみられる「平行葉脈圧痕」などから、東北地方の後北式、北大式、擦文土器とのつながりを指摘した。相田の指摘は、加藤学が見出

神 元 （ 7 2 4 ）	養 老 六 （ 7 2 2 ）	養 老 三 （ 7 1 9 ）	養 老 元 （ 7 1 7 ）	聖 武 二 （ 7 1 6 ）	聖 武 元 （ 7 1 5 ）	和 銅 七 （ 7 1 4 ）	大 化 四 （ 6 4 8 ）	大 化 三 （ 6 4 7 ）	年 月 日	事 項	出 典
陸奥国の鎮守軍卒らを陸奥国の戸籍に付けて、家族を招くことを許可する。	諸国司に柵戸一〇〇〇人を選定させて陸奥の鎮所に移配する。	東海・東山・北陸三道の民二〇〇戸を出羽国に移配する。	信濃・上野・越前・越後四国の百姓各一〇〇戸を出羽国の柵戸とする。	信濃・上野・越前・越後四国の百姓各一〇〇戸を出羽国に配属する。	相模・上総・常陸・上野・武蔵・下野六国の富民一〇〇〇戸を陸奥に移配。	尾張・上野・信濃・越後国の民二〇〇戸を出羽の柵戸とする。	磐舟柵を造って、越と信濃の民を柵戸とする。	渟足柵を造って柵戸を置く。			
続日本紀	続日本紀	続日本紀	続日本紀	続日本紀	続日本紀	続日本紀	日本書紀	日本書紀			

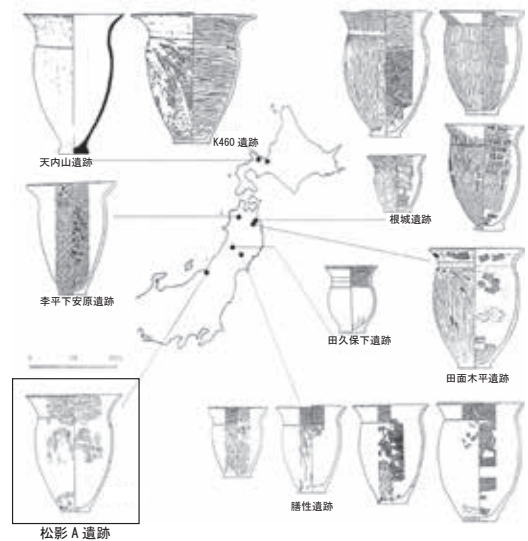
第5図 移民記事

した「北方系土器」の存在が、古墳時代前期以来の連続とした「北とのつながり」の所産である可能性を示した。

水澤幸一は、阿賀北地域に位置する胎内市から出土する北方系土器について、出土遺跡の立地、消長などを丹念に検討することで、阿賀北地域で北方系土器が出土する歴史的背景に迫っている〔水澤 2008〕。水澤によれば、北方系土器が出土する遺跡は、砂丘列沿いに展開する集落で、8世紀前後に集中する傾向があるという。さらに水澤は『日本書紀』の磐舟柵修繕記事（698・700年）に注目し、北方系土器を柵養蝦夷の存在と結び付けて解釈した。そして、北方系土器が8世紀以後、姿を消す要因として、和銅2（709）年の出羽柵が設置されたことに伴い、柵養蝦夷が出羽柵（秋田城）へ移動したためとする。当然、検証が必要ではあるが、魅力的な仮説ではある。

春日真実は、外来系土器の分析を通じて、その歴史的解釈について積極的に言及している。阿賀北地域の村上市三角点下住居跡出土土器の分析では、北陸・信濃系譜の可能性のある把手付球胴釜や多孔底土器の存在から、信濃・北陸方面から阿賀北地域への移動・移住の可能性を示唆する（第7図）〔春日 2005〕。さらに春日は、東北系土器が越後平野以北、特に阿賀北地域で多く確認される背景に、8世紀初頭の出羽柵造営に際して淳足柵・磐舟柵への「先進地視察」に伴う可能性に言及する〔春日 2015〕。春日による一連の指摘は、春日自身や新潟古代土器研究会〔新潟古代土器研究会 2004〕に代表される新潟県内の古代土器研究の成果をベースとしたもので、魅力的な仮説として今後の研究指針を示したものである。

また、春日は不動産である建物構造にも注目している。畿内から波及した「側柱縦穴建物」や、カマド



第6図 北方系土器の類例



第7図 側柱建物と円筒形・板状土製品の伝播

点については、近年小林昌二、相澤央といった古代史研究の立場からの再検討、批判〔小林 2016・相澤 2019〕があるが、魅力的な仮説である。この文献史学から提示された仮説を今後は考古学的視点から検証し、論証していかなければならないと考えている。

7 調査研究の課題と今後の見通し

誤解を恐れずにいえば今後、発掘調査による城柵発見の可能性は必ずしも高いとはいえない。淳足柵で見れば、有力地である信濃川河口～阿賀野川河口周辺域の多くが工業地帯もしくは市街地化しており、過去の信濃川、阿賀野川の乱流の歴史をみれば消失の可能性も十分考えうる地域である。また、磐舟柵の有力地とされる旧磐舟潟周辺は、大規模開発等による発掘調査の見込みが薄い地域といえる。このような現状では、関雅之が指摘するように既刊調査報告書の見直し〔関 2011〕も当然必要となるし、その上で、春日真実らが進める柵戸（移民）の存在を考古資料からトレースする作業が一層重要性を増すことは自明である。一方で、文献にはみられない移民の存在についても、考古学的見地から見つめ直すことで新しい視点を提供できるものと思われる。

8 おわりに

筆者は、新型コロナウイルスの影響で検討会当日の参加を見送った。やむを得ない事情にせよ関係者の皆様には多大なるご迷惑をおかけしたことは変わりはない。心よりお詫び申し上げます次第である。また、検討会資料の作成、本稿執筆にあたっては、下記の機関・個人にご協力を賜りました。記して御礼申し上げます。

なお、本稿は、高梨学術奨励基金 2019 年度若手研究助成の成果を一部に含んでいる。

新潟県教育庁文化行政課、古代城柵官衙遺跡検討会事務局、春日真実、石川智紀、小此木真理、小林隆幸、高橋保雄

註

- 1) 研究成果については、文献史学・考古学含め枚挙に暇がないため組織的な調査・研究に限定した。詳細な研究史については、坂井 1994、廣野 1994、小林ほか 2004 に詳しいため参照願いたい。
- 2) ボーリング調査は、現在まで継続的に進められているが、柵設置地に繋がる直接的な証拠を把握するには至っていない。橋本博文は、牡丹山諏訪神社古墳の存在などから淳足柵候補地として旧阿賀野川左岸まで視野を広げる必要性を指摘している。また、従来のボーリング調査に加えてトレンチ掘削等の小規模発掘による遺構確認の有効性について提言を行っている。
- 3) ここでの城柵設置地域とは、阿賀野川流域から北を包括する地域を指す。現在の行政区分に従えば、概ね新潟市、新発田市、聖籠町、胎内市、村上市、阿賀野市に相当する。ただし、厳密に範囲を線引きできるようなものではないことは、城柵そのものが発見されない以上致し方ないと考える。
- 4) 新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係で管理している「新潟県埋蔵文化財遺跡台帳」（2020 年 1 月末日現在）に登録されている遺跡（埋蔵文化財包蔵地）を対象とした。
- 5) 遺跡立地の変化については、寺崎裕助による新潟平野における遺跡分布の先駆的な研究ですでに指摘されている〔寺崎 2002〕。
- 6) 重要な指摘なので全文ママで列記しておきたい。「頸城の場合、かなり開発が進んでいたことが推測される。すなわち、越後には郡が七つ、郷が三十四あるが、郡別の郷数は頸城郡が一〇で、他の郡に比べ特に多い。平野部を主とした面積は、頸城郡が他より特に広くはないことから、頸城郡は郷の分布密度が相対的にかなり高いといえる。そのなかでも一〇郷のうち九郷までが分布する頸城平野の地域は、越後では最も高いことになる。頸城平野の地域は郷の分布密度、すなわち人口密度が高く、その背景として生産力も高いことが考えられる。このことは、東大寺への封物額における郡別の差にも現れている〔桑原 1986〕。国府が頸城郡に置かれたのも、こうした背景があったことだろう。〕〔坂井 2008〕。

7) 本項で指摘した城柵設置地域における遺跡動態の低調については、これまで幾人もの研究者が言及してきた点であり、その結論自体は自明のものともいえる。しかし、具体的な遺跡数という目に見える形で客観的なデータを提示することは学術的手続きの上で必要と判断し、あえて煩雑な手続きを踏んだ。

引用・参考文献

- 相澤 央 2019「淳足柵の造営と遷都」『磨斧作針』橋本博史先生退職記念論集 橋本博史先生退職記念事業実行委員会
- 相田泰臣 2009「古墳時代の角田山麓と阿賀北における土器の一樣相」『新潟県の考古学』Ⅱ 新潟県考古学会
- 阿部義平 2006「古代城柵の研究（三）」『国立歴史民俗博物館研究報告』第133集 国立歴史民俗博物館
- 今泉隆雄 2005「多賀城の創建-郡山遺跡から多賀城へ-」『条里制・古代都市研究』第17号 条里制・古代都市研究会
- 卜部厚志・高濱信行 2004「淳足柵を探索する浅層地質調査および越後平野の形成過程の復元」『前近代の潟湖河川交通と遺跡の立地の地域史的研究 平成14年度研究経過報告書』
- 小野 忍 1994『古代官衙の終末をめぐる諸問題』東日本埋蔵文化財研究会
- 春日真実 2003「越後出土の円筒型土製品・板状土製品について」『蟹気楼』秋山進午先生古希記念論集刊行会
- 春日真実 2005「新潟県村上市三角点下住居跡出土土器について」『古代の越後と佐渡』高志書院
- 春日真実 2006「第3章 古代越後の集団と地域」『日本海歴史体系』第二巻 古代篇Ⅱ 清文堂出版
- 春日真実 2014「古代遺跡の動態-西蒲原地域を事例として-」『郷土史燕』第7号 燕市教育委員会・燕市郷土史研究会連合会
- 春日真実 2015「古代西蒲原地域の土師器煮炊具」『郷土史燕』第8号 燕市教育委員会・燕市郷土史研究会連合会
- 加藤 学 2004「新潟県域における北方系の土師器甕-事例紹介と問題提起」『古代阿賀北地域の土器様相』新潟古代土器研究会
- 加藤 稔 1996「出羽国府遷移論」『山形史学』横山昭男先生退官記念号 山形史学研究会
- 川崎利夫 2008「出羽国成立前後の遺跡・遺物」『出羽国ができるころ』山形県立うきたむ風土記の丘資料館
- 工藤雅樹 1998『古代蝦夷の考古学』吉川弘文館
- 工藤雅樹 2001『蝦夷の古代史』平凡社
- 桑原正史 1986「中央集権国家の建設と越の蝦夷」『新潟県史』通史編 新潟県
- 小林昌二ほか 2001『前近代の潟湖河川交通と遺跡の立地の地域史的研究 平成12年度研究経過報告書』
- 小林昌二ほか 2004『前近代の潟湖河川交通と遺跡の立地の地域史的研究 平成14年度研究経過報告書』
- 小林昌二 2005「浅層地質歴史学の創造 平成16年度新潟大学学長裁量経費プロジェクト研究 研究成果報告書」
- 小林昌二 2016「古代東北「双子の城柵」名称考-郡山遺跡と淳足柵-」『新潟史学』第74号 新潟史学会
- 坂井秀弥 1994「淳足柵研究の現状」『新潟考古』第5号 新潟県考古学会
- 坂井秀弥 2008『古代地域社会の考古学』同成社
- 坂井秀弥 2013「地域社会の環境・交通・開発-越後平野を例に-」『環境の日本史』2 吉川弘文館
- 佐藤禎宏 1978「平安時代の出羽の国府-城輪柵跡と八森遺跡の調査から-」『山形教育』第198号 山形教育研究所
- 佐藤敏幸・大久保弥生 2017「陸奥における古墳時代後期から奈良時代の高杯(1)-宮城県のスカシ付高杯を中心に-」『宮城考古学』第19号 宮城県考古学会
- 関 雅之 2011「昭和三年・磐舟柵推定地発掘の学史的意義」『越佐研究』第六十八集 新潟県人文研究会
- 田中祐樹 2018「透かし入り土師器高杯の新例-田上町行屋崎遺跡出土資料の紹介-」『新潟考古学談話会会報』第36号 新潟考古学談話会
- 田中祐樹 2019a「柵造営前後の外來系土器について-関東系・東北系を中心に-」『新潟考古』第30号 新潟県考古学会
- 田中祐樹 2019b「田上町行屋崎遺跡出土遺物にみられる外來系要素について」『研究紀要』第10号 (公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田中祐樹 2020「越国の未発見城柵」『第46回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』古代城柵官衙遺跡検討会
- 寺崎裕助 2002「新潟平野の遺跡」『新潟考古学談話会会報』第24号 新潟考古学談話会
- 新潟県教育委員会 2013『平成24年度 越後国域確定1300年記念事業 記録集』
- 新潟古代土器研究会 2004『越後阿賀北地域の古代土器様相』
- 平川 南 1995「八幡林遺跡木簡と地方官衙論」『木簡研究』第17号 木簡学会
- 平野団三 1963「乙宝寺心礎と上越心礎の問題」『越佐研究』第二十集 新潟県人文研究会
- 廣野耕造 1994「磐舟柵研究の現状」『新潟考古』第5号 新潟県考古学会
- 水澤幸一 2008「岩船柵修理前後の北方系土器-胎内市内遺跡を中心として-」『多知波奈の考古学-上野恵司先生追悼論集-』橘考古学会
- 村上市岩船郡学校教育研究協議会 1955『村上市岩船郡郷土史』
- 【発掘調査報告書】

甘粕健ほか 1996『磐舟浦田山古墳群発掘調査報告書』 村上市教育委員会・新潟大学考古学研究室
飯坂盛泰ほか 2002『蔵ノ坪遺跡』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会
堅木宜弘ほか 2011『檀風城跡・下国府遺跡』 佐渡市教育委員会
加藤 学 2001『松影A遺跡』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会
川上貞雄ほか 1991『発久遺跡』 笹神村教育委員会
川上貞雄 1997『曽根遺跡Ⅲ 天王小学校改築に伴う遺跡発掘調査報告書』 豊浦町教育委員会
川村 尚 2008『佐渡国分寺跡発掘調査報告Ⅲ』 佐渡市教育委員会
小池邦明ほか 1993『新潟市の場遺跡』 新潟市教育委員会
坂井秀弥ほか 1984『今池遺跡 下新町遺跡 子安遺跡1』 新潟県教育委員会
鈴木俊成ほか 2010『西部遺跡2』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会
高橋保ほか 2002『箕輪遺跡Ⅰ』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会
高橋 勉 1984『栗原遺跡 第7次・第8次発掘調査報告書』 新井市教育委員会
田中 靖ほか 1992『八幡林遺跡』 和島村教育委員会
田中 靖ほか 1998『下ノ西遺跡－出土木簡を中心に－』 和島村教育委員会
田畑 弘ほか 2015『行屋崎遺跡』 田上町教育委員会
寺村光晴ほか 1985『横滝山廃寺跡発掘調査概報』 寺泊町教育委員会
戸根与八郎ほか 1992『木崎山遺跡』 新潟県教育委員会
波済 健 1956『岩船柵跡』
新潟県教育委員会 1962『磐舟－磐舟柵跡推定地調査報告書』
新潟市教育委員会 2012『大沢谷内遺跡Ⅱ 第7・9・11・12・14次調査』
渡辺ますみほか 1994『緒立C遺跡発掘調査報告書』 黒崎町教育委員会

【図版出典】

第1図 筆者作成
第2図 国土地理院基盤地図情報数値標高モデルを基に筆者作成
第3図 国土地理院基盤地図情報数値標高モデルを基に筆者作成
第4図 国土地理院基盤地図情報数値標高モデルを基に筆者作成
第5図 筆者作成
第6図 加藤学 2001 を改変
第7図 新潟県教育委員会 2013 を改変
第8図 田中祐樹 2019b を改変
第1表 筆者作成
第2表 筆者作成